

## 米占領軍の館山上陸と「4日間」の直接軍政

愛沢伸雄（NPO法人安房文化遺産フォーラム代表

千葉大学非常勤講師）

1945年8月15日正午、「戦争終結の詔勅」が發布されたが、館山の街頭では陸軍の軍人が血気盛んに「国民よ、総決起せよ」と檄をとばしていたという。翌日には、木更津基地の一機が飛び立ち、147師団司令部や東京湾要塞司令部の上空から「終戦は敵の謀略だ。我々は断固として最後まで戦う」内容のビラを撒いた。

翌16日夜、東京湾要塞司令部があった船形国民学校での終戦詔勅伝達式では、一部将校が147師団第427連隊を動かして、伝達式の侍従武官や師団長はじめ全将校を取り囲み全員を射殺して、東京に向かうというクーデターを画策したという。いずれも未遂で終わっている。

館山は軍事戦略上、最重要地域であったので、関東侵攻計画「コロネット」作戦では侵攻の上陸地点と想定しただけでなく、占領計画では「ブラックリスト」作戦を検討しながら、日本降伏後の最初の占領政策を実施する地域に館山を構想していたと思われる。

米軍司令部は、大本営に対して「9月1日、占領軍本隊である米第8軍の一部が館山海軍航空隊に進駐する」と打電してきた。30日朝に第6海兵師団は富津岬に上陸し、東京湾要塞の要である海堡を爆破し、午前8時頃にはマッカーサーが厚木に到着した。同日館山では、占領軍を迎えるために館山終戦連絡委員会を設置し、まず米軍駐屯地になる基地周辺の民家に強制立ち退きを命じた。30日には「館空」基地東岸壁に、米第8軍のクロフォード少佐が指揮する先遣海兵隊235名が上陸した。このとき、占領軍による強姦・強奪・暴行など30数件が館山警察により立件されている。

米軍は東京湾岸をはさむ館山と横浜に、それぞれ正規軍を上陸させ、首都制圧のはさみ撃ち作戦を計画した。戦艦ミズーリ号で降伏文書調印式がおこなわれた翌9月3日9時20分、総括指揮官カニンガム准将率いる陸軍第8軍第11軍団112騎兵（機動）連隊戦闘団（以下112RCTと略）の正規軍約3,500人が館山上陸した。この部隊は日本軍の武装解除と民政監督を任務としていた。同日付で「米軍ニヨル館山湾地区ノ占領」6項目の指令を出し、24時間以内に軍需施設的位置図や交通施設等の概況を報告することと、占領軍は館山の軍政のために「軍政参謀課」を設置するとした。「一切ノ学校ヲ閉鎖」命令をはじめ、劇場や酒場の閉鎖、午後7時から午前6時まで市民の夜間外出禁止なども命じられた。GHQはポツダム宣言にそって、日本政府を通じた間接的な占領行政を指示していたにもかかわらず、日本本土では唯一「直接軍政」を敷いたのであった。

驚いた館山終戦連絡委員会は、すぐに政府に連絡し、米太平洋陸軍総司令部に中止を求めた。結局、館山の占領軍は新聞で「米軍と市民との間に突発しそうな事件を未然に防ぐのが第一の目的」と表明し、4日後に学校の開校や酒場営業を許可した。戦後史において、館山の直接軍政は、謎のまま、幻の「4日間」として今日にいたっている。

### ○米占領軍の新資料 ～上陸部隊の112騎兵（機動）連隊戦闘団の動き～

今回、館山上陸した112RCTについて、アメリカのテキサス軍事博物館に問い合わせた。その結果、副館長リサ・シャリック氏から貴重な資料の提供を受けた。以下、概略を報告する。ブラックリスト作戦は8月18日に実行に移され、112RCTはフィリピンから日本への移動する命令を受けた。装備と兵士の移動や輸送師団第65輸送部隊への積み込みは、8月20日にはじまり24日

に完了した。8月22日の「戦地指令 No. 23」により 112RCT は9月3日に日本本州・館山に上陸拠点を築いていく任務が与えられた。「戦地指令 No. 1」では、第11軍団 112機甲連隊も増強されて、本州・館山海岸に上陸拠点を1000ヤード(900m)確保する特務が命ぜられた。112RCT は8月25日にフィリッピンを出港したものの、途中数個の台風を避けるための港に戻る指令を受けた。27日には再出港して、日本にむかった。

なお、報告書では「冷たい水に濡れた衣服を着た集団」と表現されている部隊(海兵隊の機雷などに危険物を掃海する特殊部隊と思われる)がすでに館山湾付近にいて作業しており、そのために途中で待機となった。その間の移動はすべて厳しい灯火管制のもとでの航海であった。

112RCT は、9月2日の午前7時に東京湾に入った。この日は、戦艦ミズーリ号で降伏調印式がおこなわれ占領のスタートにあたる。占領部隊にとって長く記憶に残る壮観な光景であった。何百にもおよぶ艦載機が、輸送船団や太平洋艦隊のために雷鳴のように上空から援護し、何百機のB29爆撃機が東京湾の上空を旋回していた。輸送師団第65輸送部隊は、降伏条件が調印される間、戦艦ミズーリからおおよそ1,500ヤード離れて停泊した。

### ○館山への上陸と「直接軍政」のはじまり

9月3日の午前3時に輸送師団は館山湾に入り、午前7時に館山海軍航空基地の北4000ヤード(3.6km)に停泊した。すでに偵察隊(先遣隊である海兵隊)が来て館山の海岸を使用するのは困難と報告し、高ノ島にある館山海軍航空隊水上班滑走路が良いということで、上陸地が指定された。そして、午前7時30分に館山地域の外務省機関や海軍・陸軍の代表者と会うためにスタッフが海岸へと向かった。日本外務省の林男爵や陸軍の野村大佐、そして海軍の鬼塚大佐がそれぞれのスタッフとともに、館山海軍航空隊水上班滑走路に現れた。林男爵や野村大佐、鬼塚大佐らは、日本人通訳の小林を伴って、総括指揮官カニンガム准将やスタッフとの協議のため、輸送師団の旗艦ラバカ(USS LAVACA APA-180)に連れて来られた。

日本側は館山地域の陸軍・海軍や民間人の状況と、武装解除に向けて迅速な行動をとっていることを報告した。警備のために軍と警察は直ちに200名まで減らすことが合意された。総括指揮官カニンガムは、司令部からの命令に従って、日本側は24時間以内に、軍事施設と民間施設の両方が記載された地図を付けて報告を提出するよう指示した。とくに日本側の役人には民間人が持っている武器や銃弾、そして、市民の門限や公共の集会、漁業や学校などに対して特別な指示が与えられた。112RCTの兵士たちにも、神社や美術品、そして民間人にたいする対応などに関して命令が出されたことを、その時に日本の役人たちに知らされた。館山の代表には最大限協力をすることが期待され、会談は午前9時30分に終わった。

同時刻に112RCTと機甲連隊が波状的に上陸し、基地の周囲を占拠した。午前10時、112RCTの司令部が館山海軍航空隊水上班の水上飛行機格納庫に開設され、112RCTは第11空挺師団の指揮下に入るようになった。第11軍団指揮官とともに、ウィルキンソン中將も上陸して査察した。

上陸部隊は最初の野営地に移動して、重要な軍事施設と集積場には警護兵士が配備され、数日前から来ていた分遣隊の任務が解かれ、駆逐艦に乗って出て行った。司令部は航空隊本庁舎の建物に移され、輸送してきたものの積み降ろしも順調に進みその日の24時に終了した。9月4日は現地のパトロールが強化され館山周辺の砲台を査察し使用できないようし、さらに勝山村(現鋸南町)から海岸線の道路に沿って南の神戸村(現館山市佐野)まで偵察パトロールがおこなわれている。館山駅には警備所が設置され、館山市は「他の米占領軍兵士の立ち入りが禁止された」と報告されている。これは館山での「直接軍政」を112RCTに徹底させる指令と推察される。

⇒【証言の会(録) P.18 参照】